《れんさい》

釜ケ崎手帖(9)

サルマタ、パンツ、ブリーフ……下着の話

サルマタといったら古すぎるかな。じゃあパンツもだめだろうな。ブリーフならいいんだろ。

だけどほんとは、サルマタはサルマタ、パンツはパンツで別々だし、ブリーフも独自のかっこうしてるってことは、みんながよく知ってのとおり。

で、ハナシはこれからなんだが、あるとき婦人雑誌の古いのを眺めてたら、こんなことが書いてあった。どこかの奥さんの話だよ。

――主人の下着は毎日とりかえてもらいます。だってそれは妻である私の誇りですわ……

どう思う、みんな？

ちょっと考えてみようじゃないか。

一体、おれたち、毎日下着（サルマタ、パンツ、ブリーフまたはフンドシでも）をとりかえてるだろうか――

ま、大ていの者がとりかえてないな。

二日に一度、三日に一度ぐらいが平均だと思うけど、数計ってものはないから見当で言ってるだけのこと。

なかには一週間、十日と、一定の長所だけ変色してきてもまだ取りかえない者もいる、この方はたしか、まちがいない。

それから、実際にそんな反ぱちがいたんで知ってるけど、ごくたまには毎日仕事から帰ってくると、サケを飲む前に、メシを食う前に、必ずドヤへ帰って下着（この場合は肌着のシャツなども）を全部洗濯する者もいるんだよね。こういう人は、ホコロビなんかできたら自分でつくろいもやってる。ひとり暮しに馴れてるというか、御清潔というか、ほんとはおれたちみんな、こうでなくちゃいけないと思うよ。何しろ現場へ出たら、どんなハズミで死ぬかも知れない稼業だもの。

とは言ってみるけれど、実際におれたちがそうしてないのはもう書いた通り。そこでもう少しつっこんで行くと――

二日か三日に一回下着を替えるとして、前のをちゃんと洗濯する者（銭湯でしようとドヤでしようと）と、洗わずに棄ててしまう者と、種類は大きく二つに分れる。そして一週間十日のはきつづけ組の場合は、もう洗ってもとれないようなシミがついてるから、ほとんどは一回きりの使い棄てだ。

こうして使い棄てられたパンツはどう処分されるか。

ドヤの小さな棚の上にくしゃくしゃの下着が棄ててあったり、銭湯の脱衣箱にまだあったかそうなのがれめてあったり（銭湯は代りの下着を売ってるからネ）、そんなんはお互い何回も経験ズミだ。と同じように、道ばたの古着屋の商品のなかに、汚いざらしの下着の山があるのもみんな知ってるはず。つまり、棄てる神あれば拾う神ありってのはこのハナシなんだけど、洗って売ってる下着を買ってはいて、それでまた――なあんて考えてみると面白いよね。

さて、なんだっけな。

おれたち主人といわれる身ではないから、誰も毎日下着のとりかえを用意してくるヤツはいないけどさ、でも少しガンバって、一人で洗濯して毎日きれいな下着を身につけるようにしたら、と言ってみたいわけ。

釜でみんなが毎日下着を替える、汚いざらしですぐ破れる、それで下着屋から雑製屋、粗布メーカーまでいそがしくなる、いそがしくなる、いそがしくなるとメーカーの設備増強でいずれは釜まで仕事がまわってくる。仕事がまわってくるとみんなカネが残ってニョウボでも持つかとなる、するとニョウボが、主人の下着は毎日とりかえてもらいます、だってそれは妻である私の誇りですもの――と言う。こんなの残暑のユメ話としてどうやろか？　あかんか？

（K）